

チャイナ イズ ベリー ハード ワーク

あれから二時間ほども眠っただろうか。ふと目を覚ますと、あれほど陸続とした夜の避難民たちの姿も櫛の歯の抜けたような様子だった。夜はすでにしらみ、陸そのものと化したかのようだった人々も起き上がり、目覚めた人々の動きが、早朝の駅前広場にある種のあわただしさのような雰囲気を漂わせていた。頭上高く闇にきわだつたかのような『西安』のネオンサインもあたりが明るくなるのに従って、その存在感を人々そのものの動きに譲り渡す。

あまり眠れなかつたので、とても眠たくて、そのままあたりの様子などにはおかまいなく眠り続けたかつたのだけれども、足もとを歩き交う人の足音が気になるし、掃除婦のおばさんたちも広場を掃き始めたので、あきらめて僕は起き上がった。睡眠不足と疲労のために体はセメントで固められたように感じられ、関節は動かそうとするとギイと音をたてそうな感じだった。

冷たいコンクリートの上に眠ったからか、我慢できないほど催してきたので、厕所（トイレ）を捜した。そろそろ仕事を始めるらしい地図売りのおばさんに厕所の場所を尋ね、ついでに西安地図を買う。

用を足したあと、售票処を覗いてみた。西安ではしばらくゆっくりとして三日後の列車で大同（タートン）へ向かうつもりだったのだけれども、とりあえず様子だけでも見ておこうと思ったのだ。售票処内の窓口は一部を除いてほとんどがまだ閉ざされていたけれども、見てみるとどうやら当日券しか発行していないような様子だった。中国一の観光地らしく、售票処の二階は外国人専用の切符売り場になっている。どうやら前売りの切符は市内の售票処で扱っているらしいと納得し、售票処の建物を出た。

地図を調べて、駅前の停留所から五路の路線バスに乗って、勝利飯店へと向かう。

西安の街は、最近修復されたらしく思われる立派な城壁と堀によって四角く囲われている。城壁の長さは一辺が三キロほどだろうか。城内を東西に二分するようにして、北大街、南大街という大通りが貫き、それぞれ北門、南門と呼ばれる城門がそびえている。火車站は北門の東、城壁の東北角に近いところに位置する。そこから南へと延びる道路は解放路とそれに続いて和平路であり、南の城門は和平門と名付けられている。勝利飯店は和平門をぐぐり抜けたところにある。

早朝なのでがらがらの二両連結バスは一路南へと西安の街を貫くようにして走っていく。和平門停留所は城門をぐぐり抜けてすぐの場所。間違

えようもない。ただ少し心配だったのは、あまりに朝が早いのでホテルにチェックインできるのかどうかということ、そして部屋が空いているかどうかということだ。

和平門でバスを下車すると、交差点の脇にある勝利飯店の建物はすぐに分かった。そびえるというほど立派な建物ではないが、外国人用のホテルではある。まだ扉が閉ざされているのではないかと心配したけれども、杞憂。まだ寝ぼけ眼という風情だったけれども、フロントには服務員の女性がいて、声をかけると簡単にチェックインすることができた。五階の四人部屋で、一泊二〇元（FEC）。ただいまのところは、部屋には僕ひとり。身を投げ出すようにしてベッドに横たわった。

しばらく眠り、それから腹が減ってきたので、昨夜のチータンの残り二個をむさぼる。お茶を入れ、煙草を一服し、地図を広げて、さてどうしようか。とりあえず市内の見物を兼ねて、火車票予售処（予約チケット売り場）を覗いてみようか、と思う。それから市街南郊外に大雁塔（ターイェンター）と、その付近に歴史博物館があるので、そこへ行ってみようか。

大ざっぱに本日の予定を決めて部屋を出ようとすると、ちょうど部屋に入ろうとする西洋人のカップルとはちあわせた。同室の仲間になるので軽く挨拶をし、ホテルを出る。

ホテルでひと眠りしている間に、雨が降ったのかもしれない。街はしつとりと濡れて、静かだった。和平門から南の城壁に沿って南門の方へと向かう。ひっそりとして人通りのほとんどない歩道。車道をへだてた堀の向こうには立派な城壁が続いていた。この城壁は明の時代（一三七四―一三七八年）に造られたもので、高さは一二メートル、幅は一五―一八メートルの立派なものだ。

二〇分ほど歩き、ひときわ立派な南門に至る。ちよつとした要塞のような南門をくぐり抜けて、北へ、南大街、北大街とたどっていく。都心部に近づくにつれて車や人通りの賑やかさは増していくけれども、それでも曇り空の下にひっそりと都心部のビルはそびえ、建築中のビルは竹の衣をまとって静かにたたずんでいた。南大街と北大街の境目は大きなロータリーになっていて、その中央に鐘楼がそびえている。鐘楼は西安のシンボルともいえるべき建物で、地上三メートル。がっしりとしたレンガの土台に三層の木造建築が建てられている。この鐘楼には登ることもできるのだけれども、それはあとのことにして、北大街の繁華街を售票処を目指して歩いていく。

火車票予售処は北大街を一〇分ほど北へ上がったところ、都心部の北はずれという印象の場所にあった。街中の售票処だけれども、駅のもの

変わりはない。各方面行きの窓口があり、数人から十数人のチケットを求めた人がその前に列をつくっていた。行列はたいしたことはなかった。大同方向の窓口には並ぶことにする。時刻表を調べて、一応決めた列車は一七六次の西安発包頭行きで、西安発は一五〇二二、大同着は翌日の一一・一二。三日後のチケット。なんとか硬臥(寝台)をと思ふ。列は数人しか並んでいなかった。すぐに順番が来た。窓口から百元札を突き出して、

「イーチャーリユーツー(一七六次)ターホーテンデ(大后天的)タオタートン(到大同)インウオイーチャン(硬臥一枚)！」
と叫んだ。

窓口の女性服務員は少し不審そうな顔をし、何事かを尋ねる。

「××××？」

服務員の質問の意味が分からないので、僕は適当に、「対、対(そうだ、そうだ)！」

と答えた。南京の船のチケット売り場で使った手だ。

服務員は納得したような様子で、チケットをよこした。六九元なり。列車のチケットの多くは中国人に成りすまして、中国人料金で手に入ってきたのだけれども、さすがに硬臥座席のチケットはその数が少ないというところもあつて、ほとんど不可能だろうと考えていた。しかしためしてみると、意外にあつけなく手に入れることができ、僕はほつとするとともに何か大きな仕事を成し遂げたような満足感を味わった。しかしそれも瞬時のことだった。

售票処から足を踏み出しながらチケットを確認すると、なんとそれは后天(明後日)のチケットだったのだ。三日後に西安を出発するということを漠然と決めていたので、僕は焦つて、もう一度窓口へと向かった。そして服務員に告げる、

「これは后天のチケットだ。僕は大后天のチケットが欲しい」と。

それを聞いた服務員は言葉をまくしたて、

「いらぬのなら、返せ」

というような言葉を投げ返した。

僕はチケットを手渡し、服務員は七〇元を投げてよこした。瞬間僕はラッキーと思つた。と言うのもチケットは六九元だったからだ。しかし僕はすぐに反省する。最初にチケットを売るときに服務員が尋ねていたのは「大后天のものはまだ売っていない。后天のものならあるけれども、それでもいいか？」ということだったのかもしれない。もしもそうなら、それに「対、対」と答えたのだから、悪いことをしたな、と。それに別に大后天でないといけないということはないのだから、后天に西安発というこ

とでもいいか、と。

そのように考えた僕はもう一度窓口へと向かった。

「あのう、やっぱり后天のチケットでいいです」

しかし、一度気分を害した服務員は取り付くしまもない。どなり散らすような言葉を投げ返したあげく、

「メイヨー（没有）！　メイヨー」

結局、ころろと態度をひるがえした自分が悪いのだし、もともと違法なことをしているのだから、チケットを手に入れるのはあきらめたのだ。心ならずも一元は返しそびれたけれども、これ以上窓口顔を出したら剣幕がどうなるか分からなかったので、もらっておくことにした。

せっかく一度は手に入れたチケットを逃してしまつて、少し重たい気分分は僕が火車站へと向かった。というのも、明日もう一度同じ火車票予售処にアタックするということも考えられたのだけれども、まだ同じ服務員に当たたらと思うと、どうもそういう気にはなれない。それに列車のチケットを手に入れることは一仕事なので、早くかたづけたいという気もあつた。街中の中国人用のチケット売り場では三日後のチケットは扱っていないようだけれども、駅の外国人用の窓口ならば扱っているかもしれないと思つたのだ。

北大街の大通りを北門まで歩き、そこから北の城壁に沿つて火車站へと向かった。城壁沿いの小道は雨にぬかるみ、朽ちかけた煉瓦を剥き出しにしたような家屋や小屋がひっそりと並び、僕はふと西安の印象を「ダーテイ」というひとりで答えた香港人の若者の言葉を思い出していた。

やがて静かな裏通りという印象の小道は、突然のように開けた視界と人々や車のざわめきで賑やかな駅前広場へと接続する。それはなんのことはない駅特有の賑やかさが漂うありふれた駅前広場の情景で、昨夜のことがまるで嘘のように思われた。

通り過ぎた雨のなごりをとどめた広場を渡り、售票処の建物へと足を踏み入れた。一階は中国人用の当日券売り場で、階段を上がった二階が外国人用の売り場になっている。ところが閑散とした窓口の掲示を見てみると、窓口は一〇・三〇で終わり、午後は二・三〇からでないと開かれなということだった。がっくりとして、どうやら今日はチケットに嫌われているのかもしれない、と思つたけれども、午後にもう一度来ることにして、広場の店で缶ジュースを買つて休憩した。

駅前から路線バスに乗つて、大雁塔（タイエンター）へと向かう。大雁塔は駅から南へ、和平門をくぐり抜けてさらに南へ数キロの所にあり、

乗り換えなしで行けるし、付近には歴史博物館もあるので、そちらを回って售票処へ戻ってきたらちょうど良い時間になっているだろうと思ったのだ。

その名のとおり大雁塔というバス停でバスを降りて歩き始めると、歩道にはお土産物屋や観光客相手の食堂などが軒を並べ、いかにも観光地という雰囲気だ。少し腹が減っていたけれども、とりあえず先に見てしまおうと思つて大門前でチケットを買つて入園。西安のシンボルにしては観光客はそんなに多くはなく、ゆつくりとすることができた。

大雁塔(慈恩寺)は三蔵法師として知られる唐の高僧玄奘が困難な旅を経て天竺(インド)から持ち帰つた経典の翻訳作業のために建立されたものだ。六二九年、長安の都を出発した玄奘は、トルファン、サマルカンド、バーヤミン(アフガニスタン)、ガンダーラ(パキスタン)を経て、ついに天竺(インド)へと至つた。一六年後の六四五年、数多くの経典を持ち帰つた玄奘はここ大雁塔において自らその翻訳を行つた。現在の大雁塔は何度も修復されたものだけれども、四角錐形の独特の外観を持つ七層六四メートルの塔は当時のままだということだ。

登塔券を買つて中に入っていくと、玄奘や仏教にまつわる文物が展示してある。木造りの階段は最上階まで続いていて、登っていくことができる。最上階から覗き見ると、すぐ脇に唐代芸術博物館の書院風の建物が見え、また所々にこんもりとした緑の木立とともにほのか郊外まで見渡すことができた。

大雁塔を下り、付近の食堂で昼食をとつたあと、そのまま二〇分ほど歩いて、歴史博物館へ。最近建てられたらしい現代的な新しい建物だ。チケットを買つて、館内へ。と思つたら、職員に制止された。外国人は外国人用の入口から入るように、と言う。さすがは観光地西安、敵もさるもの、と考へながら、しかし一方では妙なむかつきを感じながら、外国人用の入口へと向かつた。ところが、外国人用の入口をスタスタと歩き、チケットはどこで買うのかな、とスタスタと歩いてみると、いつのまにか館内に入つてしまつていた。観光客が少なく、職員も暇をもてあましていて、どこかで油を売つていたのかもしれない。外国人だと見破られたむかつきと、その代わりにタダで入れてしまったというなにかやり返したような気分と、なにか悪いことをしているような罪悪感とが入り混じつた気分がした。その代わりというか、展示物はほとんど印象には残らずただただしんどいだけだった。歴史のあるかつての都、長安にふさわしく先史時代から清代にまで至る膨大な遺物に圧倒され、おまけに睡眠不足もたつたって、展示物の前を素通りしただけだ。得をしたのか、疲れ損じたのか。

歴史博物館を出たあと、ひどく疲れてしまったので、いったん勝利飯店へと戻って、しばらく眠った。

ホテルのベッドでしばらく休憩したあと、再び火車站の售票処へ。外国人用の窓口は十人程度の行列だった。外国人や香港、台湾人、華僑など。予約窓口で予約をとり、発券窓口で予約票を出してチケットを買うという方式。そのシステムが分からなくて、また窓口の閉鎖時間が迫っていたこともあってちよつと焦ったけれども、無事に三日後、六月一九日の硬臥チケットを手に入れることができた。料金は一三八元(FEC)で中国人料金の倍。まあ、チケットを手に入れたことだし、よしとしよう。

窓口に並んでいるときに、中国人の学生らしき女性に声をかけられた。ウルムチまでのチケットを代わりに買ってほしい、と言う。中国人用の窓口では手に入れにくいのもかもしれない。代わりにチケットを買うことを断わる理由はなかったのだけれども、外国人がチケットを買うためにはFECが必要なのだということを告げると、あきらめたようだった。

駅前の地下街でトイレトペーパー、インスタントコーヒー(一杯分のコーヒー、ミルク、砂糖がパッケージされたもの)と金絲猴(煙草)を買って、勝利飯店へと戻った。

夕食はホテル近所の裏通りの食堂。女主人の勧めに従って、わけも分からず注文したのだけれども、出された料理は豚肉のごつい塊で食べ切れなかった。

付近の商店で買ったビールは漢斯啤酒。煙草やビールは地方によって違うのが面白い。もつとも味の違いはほとんど僕には分からないけれども。

ホテルの部屋に戻ると、西洋人のカップルは部屋にいた。男と少し言葉を交わした。彼らはイギリスから来たと言う。部屋に入ったときからどうも雰囲気がおかしいと感じていたのだけれども、彼の話を聞いて納得した。彼によると午前中に昆明行きのチケットを買おうとして駅のチケット売り場へ行ったのだけれども、長い昼休みにひっかかったため、結局チケットを手に入れるのに七時間もかかったのだということだ。彼女はせっかくの旅行がだいなしにされたかの様子で、ご立腹。彼はいささか疲れた顔をして、

「チャイナ イズ ベリー ハードワーク」

と眩いた。(これで英語として正しいのかどうか、僕は知らない。ただこのように僕には聞こえ、十分に言いたいことは伝わったので、これではないのだ。

彼らは明日、兵馬俑を見学するツアーに参加するということだった。

彼と一緒に行かないかと誘われたので、OKした。というのも郊外の見所をまわるためには交通機関の関係でツアーでないとしても効率が悪いということが分かっていたからだ。

しかしそのときはまだ、初めて中国を訪れたイギリス人カップルにとって、その中国旅行の印象を壊滅的に破壊する「モア モア ハード ワーク(?)」が待っているということを、当のイギリス人カップルも僕も知る由はなかった。